

岩津ねぎを加害するネギアザミウマの薬剤感受性について

ネギアザミウマについては、近年全国的に産雄単為生殖系統(※)の発生が問題となり、県内の一部では感受性の低下もみられている。朝来市の岩津ねぎ産地において、2013年秋にネギアザミウマによる被害が多発した。そこで、発生した本種の薬剤感受性を検定した結果、感受性の低下は認められなかった。

内 容

2013年11月上、中旬に朝来市岩津、和田山町の岩津ねぎほ場からネギアザミウマ成虫を採集した。採集したネギアザミウマはソラマメ催芽種子を用いて飼育し、12月上旬に現地の慣行薬剤及び今後の導入検討剤等を含めた表に示す6剤について薬剤感受性検定を行った。

検定方法はソラマメ催芽種子浸漬法により行った。流水中で5～7日間浸漬し催芽させたソラマメの皮を剥き、4分割し、所定の濃度に調整した薬液に約30秒浸漬した。その後ペーパータオル上で風乾後、濾紙を入れた内径2.5cm、高さ5cmのスチロール管に入れ、その中にネギアザミウマ成虫を約10個体入れた。25℃で飼育し、1、2日ごとに供試虫の生死を調査した。

その結果、現地での慣行剤であるMEP乳剤、

ペルメトリン乳剤、イミダクロプリド水和剤、クロチアニジン水溶剤はいずれも高い防除効果が認められた(表)。新たに導入を検討しているスピノサド水和剤も効果が高く、接触毒であるトルフェンピラド乳剤も十分な効果が認められ、いずれも防除薬剤として有望と考えられた。

今後の方針

昨年、現地でネギアザミウマが多発したのは薬剤効果が低下したためではないと考えられるので、多発原因については再検討が必要である。また同一薬剤の連用は抵抗性発達の原因になるので、他剤の導入を今後検討する予定である。

〔※産雄単為生殖系統：従来の雌のみを産む系統と異なり、単為生殖で雄も産む系統〕

二井 清友 (病害虫部)

(問い合わせ先 電話：0790-47-1222)



写真 ネギアザミウマ雌成虫

表 ネギアザミウマに対する各種薬剤の感受性

薬剤名	希釈 倍数	補正死虫率(%)	
		岩津	和田山町比治
MEP乳剤	1000	100	100
ペルメトリン乳剤	3000	100	100
イミダクロプリド水和剤	4000	94.5	100
クロチアニジン水溶剤	4000	100	100
スピノサド水和剤	5000	100	100
トルフェンピラド乳剤	1000	73.9	100

2日後の結果